

場所ヲ格句の文法論的な位置づけについて*

石 田 尊

0. はじめに

経路や起点等を表すとされる場所ヲ格句については、その解釈や用法についての研究に加え、動詞のアスペクトとの関わりや対格標示の観点からの研究も示されるなど、これまでに重要な研究成果が蓄積されてきている。ただし、場所ヲ格句そのものの文法上の位置づけについては、直接目的語として分析する影山（1980）や、場所ヲ格が対格だとする三宅（1996, 2011）等の言及はあるものの、その前提となるべき観察の作業が十分にはなされていないと本稿筆者には思われる。したがって本稿では、場所ヲ格句の句としての範疇、文法的な機能、動詞句内での生起位置等に関する基本的な観察と記述の作業を行うところから検討を始め、本稿2節までに以下の点を明らかにする。

- (1) a. 場所ヲ格句は後置詞句(PP)である。
- b. 場所ヲ格句には二次述部であるものと修飾部であるものがあり、前者は非対格動詞の文に、後者は非能格動詞の文に現れる¹。
- c. 場所ヲ格句は(1)bが示す用法ごとに場所ニ格句や場所カラ格句、場所デ格句等と対立しつつ場所格後置詞句というカテゴリを形成する。

また、この(1)の結果からすると問題となる、有生内項名詞句を持つ非対格動詞の場合についても、石田（2015）が示した有生名詞句移動に関する分析を適用することで、場所ヲ格句に関しては基本的に(1)が正しいものであることを確認する。その上で、本稿2節までの成果と場所ヲ格句に認められてきた状況、経路、経由点、起点等の解釈との関連付けを本稿3節において行い、以下(2)の2点を明らかにする。

- (2) a. 場所格後置詞句の対立の中で場所ヲ格句が担う役割は、漸次的な位置変化や移動を伴う動き等が形成する何らかの「軌跡」が位置づけられる場所を示すことであり、状況、経路、経由点、起点等、場所ヲ格句に認められてきた解釈はすべて、「軌跡の位置づけられる場所」という共通性を有する。
- b. 起点の場所ヲ格句に指摘されてきた、意志性との関わりについては、文の描写や理解において場所ヲ格句が表す軌跡が読み取りやすいか否かという問題であって、無生名詞の主格句を持つ起点の場所ヲ格句の文も問題なく成立する場合がある。

1. 場所ヲ格句の範疇と文法的機能

この節では場所ヲ格句の基本的な性質について観察を行う。まず、場所ヲ格句が名詞句であるのか後置詞句であるのかという問題を確認するために、1.1節では数量詞によるテストを行う。続いて1.2節では、場所格要素（二格句、カラ格句等）の解釈上のふるまいと場所ヲ格句のそれとを付き合わせることで、場所ヲ格句には項の実体の存在場所を表す用法と、移動を伴う動きの範囲を表す用法の二用法があることを確認する。

1.1. 遊離数量詞によるテスト

遊離数量詞を用いてその主名詞に当たる名詞的な要素が名詞句(NP)であるのか後置詞句(PP)であるのかの判別を行う際に注意すべき点として、累積読み（多回的な解釈）の遊離数量詞についてはテストに使用することができないということがあげられる。

- (3) a. 凧子は男の子から3人プレゼントをもらった 累積読み
 b. 男の子が3人ラーメンを食べている 非部分かつ同時読み

(3)aについては、話者により容認性に問題を感じる場合もあるだろうが、容認可能な場合には「通算で3人」というような累積読みが現れる。一方(3)bでは、「男の子」が3人おり、その3人がラーメンを食べている、というような非部分かつ同時読みの解釈が可能である²。「男の子から」を後置詞「から」

による後置詞句だと考えることに問題はないと思われることから、後置詞句では非部分かつ同時読みは得られないということが確認できる。したがって、主名詞が名詞句であるということが保証されるのは、非部分かつ同時読みの遊離数量詞が可能な場合のみということになる。

この議論は基本的に、Ishii (1999) のNP quantifierとVP quantifierの対立、および川添 (1999) の後置存在量化詞と副詞的量化詞の対立についての議論を踏まえたものである。両者の分析は完全には重なっておらず、特に部分量の解釈の扱いに異同があるが、ここでは非部分・同時（非累積）読みの遊離数量詞が可能な場合に、その主名詞となる要素がNPであると認める、という判定の基準を採用する³。

さて、場所ヲ格句に対応する遊離数量詞には、(4) a, (5) aのように、非部分かつ同時読みの解釈が現れず、累積読みの解釈が現れる。(4) b・(5) bでは同時読みが可能であることから、文が記述する事象自体が同時読みを許さないわけではない。したがって(6)のような対格名詞句を主名詞とする遊離数量詞に可能な解釈が得られない理由は、(7)に示すように場所ヲ格句が後置詞句(PP)であり、PP内部のNPと、PP外にある遊離数量詞とが相互c統御関係のような、構造上近接した関係を構成できていないためであると考えられる(Miyagawa 1989, Ishii 1999, 川添 1999, 石田 2013 他参照)。

- (4) a. # 蒸留釜で加熱されたモロミの蒸気は釜につながる蛇管を 3 本通る
 b. 蒸留釜で加熱されたモロミの蒸気は釜につながる 3 本の蛇管 を通る
- (5) a. # 群衆が橋を 2 本渡ってこちら岸に押し寄せた
 b. 群衆が 2 本の橋 を渡ってこちら岸に押し寄せた
- (6) a. 濁流がクルマを 2 台押し流した 非部分かつ同時読み可
 b. 奏太がカブトムシを 2 匹飼っている 非部分かつ同時読み可
- (7) a. [PP [NP 蛇管を] P] [FQ 3 本]⁴ 場所ヲ格句の場合
 b. [NP クルマを] [FQ 2 台] 対格NPの場合

なお、ここでの議論については、場所ヲ格句がPPであることによってではなく、動詞句内の生起位置によって遊離数量詞が容認されないという可能性が想起されるかもしれない。しかし、Koizumi (1994) において付帯状況デ句 (depictive phrase) によって記述されることがないとされる Non-affected theme

Objectの場合((8)~(10)を参照)やDative Objectの場合((11)を参照)であっても、非部分かつ同時読みの遊離数量詞は可能であることから、遊離数量詞に関しては主名詞とのlocalな関係が優先され、動詞句内の生起位置、もう少し厳密に言えば、その主名詞および遊離数量詞が動詞Vの補部位置にあるか否かは、その容認性に直接影響しないものと考えられる。つまり、ここで扱う数量詞に関しては、Koizumi(1994)で想定されるPrinciple of Predicationのうち、特に述部のゼロレベル要素による主要部統率の有無を考慮する必要はなく、主名詞となる要素との構造的な関係のみを考慮すればよいことになる。

- (8) a. *太郎が次郎を裸で殴った (Koizumi 1994: 52(80a). 判定とも)
 b. 昨日奏太はチンピラを2人殴った
- (9) a. *太郎が次郎を裸で追いかけた (Koizumi 1994: 50(69b). 判定とも)
 b. 凜子が笑いながら女の子を2人追いかけた
- (10) a. *そのとき木村は若い男をジャージ姿で尾行していた
 b. そのとき木村は若い男を2人尾行していた
- (11) a. *大統領がびしょ濡れで太郎に勲章を与えた (Koizumi 1994: 45(54b). 判定とも)
 b. 大統領が学生に3人勲章を与えた (Koizumi 1994: 46(57a). 判定とも)

このことから、遊離数量詞の解釈を根拠とする場合、場所ヲ格句は後置詞句として分析されることになる。

場所ヲ格句を後置詞句として分析する場合、もう一点確認すべきこととして、影山(1980)が指摘する以下(12)および(13)bのような例の扱いがある。

- (12) 私はどうしても故郷が離れられない (影山 1980: 43(6))
- (13) a. 太郎はこの橋を {歩けない/渡れない}⁵
 b. 太郎はこの橋が {歩けない/渡れない}

可能文におけるヲ・ガ交替は、影山(1980)においては、起点解釈の場所ヲ格句が直接目的語であるという根拠の一つとされており、確かに以下のような他動詞目的語にも認められる現象である。

- (14) a. 奏太は凜子 {を/が} 説得できない
 b. 奏太は魚 {を/が} さばけない

しかし、そもそも可能文の環境では、場所格や意味格と意味上対応するように解釈できる主格句が現れる。

- (15) a. ポチはどうしてもペット用のプールが入れない
 b. ポチがペット用のプール {に/*を} 入らないこと
 (16) a. 今日忙しくてさ、市役所も銀行も行けたんだけど、郵便局が行けなかった
 b. 私が郵便局 {に/*を} 行くこと
 (17) a. 彼は右手がタイピングできない
 b. 彼が右手 {で/*を} タイピングすること

(15)aや(16)a, (17)aでは、焦点や総記的な解釈を伴いはするが、意味格や場所格に対応する主格句が可能である。少なくとも筆者の内省では(12)および(13)bにもそうした解釈が現れるため、他動詞の直接目的語に対応する主格句とは別のものとすることも可能だと思われる。

以上から、場所ヲ格句は後置詞句であり、どうしてもNP及び直接目的語として扱わなければならないというだけの強い根拠は存在しないと考える。

1.2. 場所句のバリエーションへの位置づけ

場所ヲ格句が後置詞句であり、直接目的語ではないとすると、同様に場所を表す後置詞句である場所ニ格句や場所カラ格等の要素と場所表現（空間表現）としての体系を構成している可能性が考えられる。まずは後置詞句による場所表現の基本的な特徴を確認する。

- | | | |
|---------|-----------------------|-------|
| (18) a. | 凜子が向こう岸に渡る | 着点 |
| b. | 凜子が <u>こちらから</u> 渡る | 起点 |
| (19) a. | 凜子が <u>ステージの方</u> に歩く | 動きの方向 |
| b. | 凜子が <u>駅まで</u> 歩く | 動きの終端 |
| c. | 凜子が <u>玄関から</u> 歩く | 動きの始端 |

(18)aと(19)a, bを比較すると, (18)aの二格句はイベント終了時の項の実体〔凜子〕の存在場所を表すのに対し, (19)aの二格句は動きの方向を表すのみで, 項の実体の存在場所を示すという意味はない。(19)bのマデ格句の場合には動きの範囲の終端を示す意味となり, 「駅」に到着した後そこに留まらず次の動作に移ってよい。(20)aでは「凜子」が「向こう岸」に到着後そこに滞在し「友人を待つ」という行為をすることが問題なく読み取れるが, (20)bでは同様の解釈ができず, 「駅」に滞在し「友人を待つ」という解釈では容認性に問題が生じるか, 歩いて時間を潰しつつ友人を待つ, というような解釈が現れるかのいずれかであろうと思われる。したがって, マデ格句の場合には実体の存在場所という意味はないことが確認できる。

- (20) a. 凜子は向こう岸に渡って友人を待つことにした
 b. ?凜子は駅まで歩いて友人を待つことにした

こうしたことは(18)bと(19)cを比較した場合でも同様であり, (18)bのカラ格句はイベント開始まで項の実体が存在していた場所を示すが, (19)cでは項の実体である「凜子」があらかじめ「玄関」という場所に存在していた, というところまでは意味されず, 「玄関」にいてもいなくてかまわない, これから玄関に移動し, その上で歩き始めてもよい, といった読みとなる。

以上のように, 場所格後置詞句には項の実体の存在場所を表す用法と, そうではない用法とが認められる。後者については, 積極的な規定としては「移動を伴う動きの方向または範囲」を表す用法として, 意味的には規定できると思われる。

同様の対立が場所ヲ格句にも認められるか, 以下検討を行う。

- (21) a. リハビリ中の凜子が橋を渡っている
 b. 知り合いがうちの店の前を通る (ので顔を見に行く)
 (22) a. リハビリ中の凜子が中庭を歩いている
 b. 知り合いがうちの店の前を走る (ので応援に行く)

(21)(22)のペアを比較しただけでは, 場所ヲ格句の質的な違いは把握しにくいかもしれないが, 「渡る」「通る」のような動詞と, 「歩く」「走る」のような動詞の文における場所要素の質的な違いについては, 以下のようなパラフ

レーズである程度確認できる。

- (23) a. *リハビリ中の凜子が橋で渡っている
 b. *知り合いがうちの店の前で通る (ので顔を見に行く)
- (24) a. (?)リハビリ中の凜子が中庭で歩いている
 b. (?)知り合いがうちの店の前で走る (ので応援に行く)

場所要素の置き換えを行ったため、(21)と(23)、(22)と(24)の対応例は同義の文とは言えないが、「歩く」「走る」では動作の場所を場所デ句により修飾し得るのに対し、「渡る」「通る」の文ではそれが不可能である。このことから、「歩く」「走る」の場所ヲ格句については「移動を伴う動きの範囲」を表すものとして捉えられるが、「渡る」「通る」については、その動詞の意味的な性質から、場所ヲ格句が動きの範囲を修飾しているとは考えにくい⁶。

以上をひとまずの材料として、場所ヲ格句には場所二格句や場所カラ格等と同様に、項の実体の存在場所を表す用法と、移動を伴う動きの範囲を表す用法とがあるものとして考察を進める。また、項の実体の存在場所を表す用法のうち、着点と起点の場合については竹沢(2000)が指摘する「空間表現の二次述部」と重なるものであるため、場所ヲ格句の場合も含めて「場所の二次述部用法」と呼ぶこととし、移動を伴う動きの範囲を表す用法については、その意味内容から「場所の修飾部用法」と呼ぶことにする。この命名や認定は、この箇所ではまだ暫定的なものであり、次節以降その妥当性を検証していくことになる。

2. 場所ヲ格句と動詞句構造

前節では場所ヲ格句が後置詞句の一種であることを遊離数量詞を用いたテスト等で確認し、さらに場所二格句や場所カラ格等の場所後置詞句と同様に二つの用法を持つことを確認した。ここでは場所格後置詞句および場所ヲ格句と動詞句構造との関わりを検討することで、二つの用法に対する記述を行う。

2.1. 場所格後置詞句としての場所ヲ格句

竹沢(2000)が指摘する空間表現の二次述部は、その叙述対象である内項名詞句よりも動詞句内の高い位置に現れる。以下では“ t_Q ”で遊離数量詞の痕

跡を示すものとする。

- (25) a. ビー玉_iが3コ側溝に t_i t_Q 落ちた
 b. ビー玉_iが側溝に t_i 3コ落ちた
 (26) a. ビー玉_iが3コポケットから t_i t_Q 落ちた
 b. ビー玉_iがポケットから t_i 3コ落ちた

(25) (26)で確認できるように、着点句や起点句よりも動詞に近い位置に、動詞内項を主名詞とした非部分かつ同時読みの遊離数量詞が現れる。(27) (28)に示すように、場所ヲ格句についてもこれと同様のことが確認できる。

- (27) a. ビー玉_iが3コテーブルを t_i t_Q 転がった
 b. ビー玉_iがテーブルを t_i 3コ転がった
 (28) a. フェラーリが3台うちの前を t_i t_Q 通った
 b. フェラーリがうちの前を t_i 3台通った

ただし、動詞内項が有生名詞の場合には、(29)～(31)に示すように各bの場所格要素を主名詞と遊離数量詞が間に挟むパターンで累積読みまたは部分読みの解釈が優勢となる⁷。この問題については続く2.2節で取り上げるが、この現象に関しても場所ヲ格句は場所ニ格句および場所カラ格句と共通している。

- (29) a. 男の子が3人池に落ちた
 b. #男の子が池に3人落ちた
 (30) a. 男の子が3人ステージから落ちた
 b. #男の子がステージから3人落ちた
 (31) a. 男の子が3人階段を(転げ)落ちた
 b. #男の子が階段を3人(転げ)落ちた

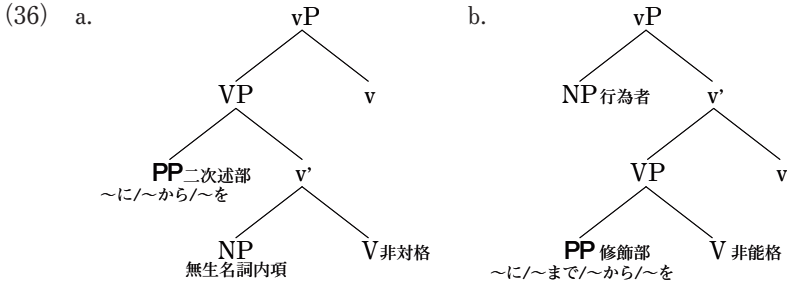
以上から場所の二次述部用法のニ格句、カラ格句、ヲ格句については、動詞句内において出現する位置が共通していることが確認できたとする。続いて場所の修飾部の場合を確認する。

- (32) a. 男の子が3人駅方向に走った

- (33) a. 男の子が3人駅まで走った
 b. #男の子が駅まで3人走った
- (34) a. 男の子が3人駅から走った
 b. #男の子が駅から3人走った
- (35) a. 男の子が3人川沿いの道を走った
 b. #男の子が川沿いの道を3人走った

(32)～(35)各bの例で確認できるように、場所の修飾部用法では場所格後置詞句をまたぐ形で非部分かつ同時読みの遊離数量詞は不可能である⁸。このことから、場所の修飾部用法の後置詞句は、少なくとも項の出現する位置よりは低い位置に現れることが確認される。

以上から、場所の二次述部用法と修飾部用法の動詞句内の位置を比較すると、以下のように示すことができる。



(36) aは、場所の二次述部用法かつ無生名詞主語の場合の「落ちる」「転がる」等の動詞句構造として想定されるものである。着点や起点に対する竹沢(2000)の分析をもとに、場所ヲ格句の場合を追加したのみ、ということになる。(36) bは、場所格後置詞句よりも述部側に項の遊離数量詞が現れないこと、および項に関する解釈から、「走る」「歩く」等が非能格動詞であると分析されることに基づいた動詞句構造の想定である。こうした構造を想定することで、場所ヲ格句(および場所格後置詞句)に項の実体の存在場所を表す用法と、移動を伴う動きの範囲を示す用法とがあり、それが動詞句構造と結びついた区分であることが示せることになる。

なお、この(36)は、場所の二次述部用法と有生名詞の内項が共起する場合

については扱っておらず、また、状況の解釈となる場所ヲ格句の場合についても扱っていない。前者の問題については続く2.2節で、後者については3.1節で取り上げる。

2.2. 有生内項が現れる非対格動詞の文について

場所ヲ格句および場所格後置詞句と動詞句構造の問題の2点目として、2.1節で先送りした以下(37)～(39)((29)～(31)の再掲)のような例を取り上げる。

- (37) a. 男の子が3人池に落ちた
- b. #男の子が池に3人落ちた
- (38) a. 男の子が3人ステージから落ちた
- b. #男の子がステージから3人落ちた
- (39) a. 男の子が3人階段を(転げ)落ちた
- b. #男の子が階段を3人(転げ)落ちた

これらは場所格後置詞句の解釈からすれば場所の二次述部用法だが、遊離数量詞の解釈としては非部分かつ同時読みの解釈がしにくく、場所の修飾部用法とも共通した特徴を持つように見えるものである。場所ヲ格句の例で確認する。

- (40) a. ボールが3コ土手を転がった
- b. 男の子が3人土手を転がり落ちた
- c. 男の子が3人廊下を走った
- (41) a. ボールが土手を3コ転がった 非部分かつ同時読み可能
- b. #男の子が土手を3人転がり落ちた
- # 非部分かつ同時読みがしにくい
- c. #男の子が廊下を3人走った # 累積読みか部分量のみ可

(41)bと(41)cには程度差もあるだろうが、(41)aと比べれば後置存在量化詞としての解釈が得にくいのが確認できる。この問題に関して、逆接ナガラ節を用いたテストを適用する。

逆接ナガラ節内では、無生名詞の非対格動詞内項と所有文内項が主格形式で現れても自然だが、有生名詞の非対格自動詞内項については容認性に問題が生

じ、他動詞外項は基本的に容認されない。つまり逆接ナガラ節は、外項主格と、所有文を除く有生内項の主格が許されない環境である⁹。

- (42) a. 彼はレース直前にマシントラブルが起きながらきっちり優勝した
 b. 冬美さんという奥さんがありながら彼はろくに家に帰らない
 c. ??あいつは試験直前にお母さんが倒れながらきっちり合格した
 d. *あいつは奥さんが晩ご飯を作りながら家に帰らなかった

この(42)のような容認性の分布を前提に、(43)のような場所ヲ格句を含む文を逆接ナガラ節に組み込んだものが(44)である。

- (43) a. 明日の夕方、親友が乗る宇宙ステーションがこの町の上空を通過する
 b. 明日の昼頃、あこがれのあの子がうちの前を通る
 c. 明日の昼頃、あこがれのあの子がうちの前を走る
 (44) a. ぼくはあの子がうちの前を通りながら、忙しくてその様子を見に行くことができなかった
 b. ??ぼくはあの子がうちの前を通りながら、忙しくて応援に行くことができなかった
 c. *ぼくはあの子がうちの前を走りながら、忙しくて応援に行くことができなかった

(43)のように主文では大きな異なりを感じられない場合でも、(44)のように逆接ナガラ節に組み込んだ場合には容認性に一定の差が生じる。無生名詞の内項が主格句となる場合、(44)aのように逆接ナガラ節の環境でも容認性に問題は生じないが、有生名詞が内項となる場合は(44)bのように容認性が低下する。しかしそれは、非能格動詞の(44)cの場合と比べると若干高い容認性となる。念のためナガラ節のアスペクトを変更した例も確認する。

- (45) a. 毎日あの衛星が上空を通過していながら、ぼくはそのことを知らなかった
 b. ??毎朝あの子がうちの前を通っていながら、ぼくはそのことを知らなかった

- c. ??毎朝あの子がうちの前を走っているながら、ぼくはそのことを知らなかった

付帯状況ナガラ節にはテイル形の述部は現れず、基本的には逆接ナガラ節の解釈となる。したがって(45)は逆接ナガラ節としての解釈を強制した状態となるが、(45)のように逆接ナガラ節内にテ節が現れた場合には、動詞外項や有生内項の主格句があっても容認性がある程度高まり、そのことと連動して(45) b, c の差もはっきりしなくなるようである。このため、ここでのテストにおいては(44) (46)のようにナガラ節内にテ節の現れない例で確認する必要がある¹⁰。(46)においては、(44)と同様の容認性の分布が認められる。

- (46) a. 常に規定量のオイルが配管を循環しながら機関部はほとんど冷却されなかった
 b. ??毎日たくさんの人がその橋を渡りながら担当者は橋脚の老朽化を放置した
 c. *毎日たくさんの人がその公園を歩きながら担当者はこれといった対策を行わなかった

以上から、二次述部用法の場所ヲ格句と有生内項主格名詞句が現れる(44) (46)各bのような例については容認性が低下すること、および若干ではあるが(44) (46)各cのような、修飾部用法の場所ヲ格句と非能格動詞による文よりは容認性が高いことの2点が確認できる。この若干の違いを無視し、有生主格句が現れる場合には(44) (46)各bのような例であっても非能格動詞文（あるいは少なくとも、非能格動詞用法としての文）であり、そのためナガラ節内の外項主格句が容認されないとする分析も可能であるかもしれない。しかし、そのように認定した場合、(44) (46)各bの場所ヲ格句が場所の二次述部用法としての解釈を有することの説明は困難となる。この問題について本稿では、石田(2015)の提案する有生名詞句移動を前提とした分析を適用する。

有生名詞句移動とは、以下(47)のような例において認められるものであり、非対格動詞文を含め動詞句が外項を欠く場合に、vの指定部に有生の項名詞句（分離不可能所有関係にある有生の所有者を含む）が移動する現象である。

- (47) a. 凜子_iが [t_i 髪] を染めてるよ (結果相解釈)

- b. 奏太_iが [t_i 腕] に包帯を巻いてるよ (結果相解釈)
 c. 女性_iが突然 t_i ばかりと倒れた
 d. 奏太_iが t_i スーツ着てるよ (結果相解釈)

この移動では、移動の対象となる名詞句が有生の類別詞を持った遊離数量詞を伴う場合、その数量詞もともに移動すると考えられ、元位置に非部分かつ同時読みの数量詞が残留することはできない。(48)bと(49)bを比較すると、では(48)bのみに非部分かつ同時読み(つまりは「女性」を主名詞とする後置存在量化詞)の解釈に問題が生じている¹¹。

- (48) (爆弾が爆発した、その衝撃で) (石田 2015 : 29 (99))
 a. 女性が 3 人ばかりと倒れた
 b. ??女性がばかりと 3 人倒れた
 (49) (近所でガスボンベが爆発した、その衝撃で) (石田 2015 : 29 (100))
 a. 雨戸が 3 枚がたとと外れた
 b. 雨戸ががたとと 3 枚外れた

場所ヲ格句を含め、場所格後置詞句のある自動詞文に、以上のような有生名詞句移動を認める立場から分析を行うと、遊離数量詞(Qで示す)がある場合の動詞句構造はそれぞれ以下になる。(50)が二次述部用法の場所格後置詞句と無生の内項名詞句の場合、(51)がここで検討している二次述部用法の場所格後置詞句と有生の内項名詞句の場合、(52)が修飾部用法の場所格後置詞句と有生の外項名詞句の場合である。

- (50) [_{VP} [_{VP} PP_{二次述部} [_{V'} NP_{無生} Q_{無生類別詞} V_{非対格動詞}]] v]
 (51) [_{VP} NP_i 有生 Q_{有生類別詞} [_{V'} [_{VP} PP_{二次述部} [_v t_i t_Q V_{非対格動詞}]] v]]]
 (52) [_{VP} NP_{外項} Q_{有生類別詞} [_{V'} [_{VP} PP_{修飾部} V_{非能格動詞}]] v]]]

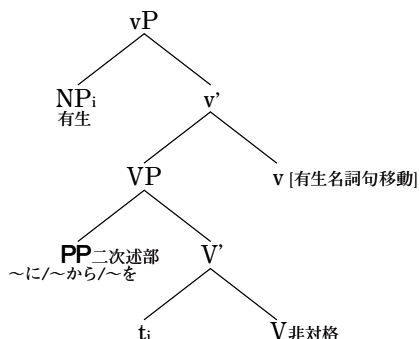
逆接ナガラ節において、vの指定部位置(他動詞文ならば外項の位置)にNPがあることが問題であるとする、(51)と(52)の構造で容認性に問題が生じることは予測できる。(51)と(52)の構造には違いもあるため、遊離数量詞を動詞に近い位置に組み込んだ場合や、ナガラ節の場合で若干の容認性や解釈上の異なりが生じることも、十分に考えられることである。さらに、(51)が

示すように有生類別詞の遊離数量詞は有生の主名詞とともに有生名詞句移動を受け、元の位置に残ることはないとする、(37)～(39)各bや(41)bで非部分かつ同時読みの解釈が困難となることも説明可能である。有生名詞句移動が適用されることによって、(37)～(39)各bや(41)bのような語順で許される遊離数量詞は副詞的量化詞のみとなるからである。

以上から、場所格後置詞句の用法と動詞タイプとを整理すると、以下のように簡潔なものとして整理されることになる。また、(36)と同様に(53)bの場合の構造を示すと(54)のようになる。ただし以下(53)には、後に3.1節で確認する状況ヲ格タイプは含まれていないものとする。

- (53) a. 場所の二次述部かつ無生名詞内項：非対格自動詞
 b. 場所の二次述部かつ有生名詞内項：非対格自動詞
 (有生名詞句移動)
 c. 場所の修飾部： 非能格自動詞

(54)



3. 場所ヲ格句の解釈をめぐって

場所ヲ格句の下位区分というもの考えた場合、本稿のこれまでの成果が意味するところは非常に単純なものであり、非対格動詞内項となる実体の存在場所を表すか、非能格動詞が表す移動を伴う動きの範囲を表すかという二つに一つとなる。一方先行研究では、たとえば杉本 (1995) のように、状況、経路、経路点、起点というように細分化された解釈または意味役割を想定して議論を行っている場合がある。本稿筆者ももちろん解釈上の直感としてはそうした区分を共有するが、このことと本稿の成果とはどのように対応するだろうか。ここではまず、場所格後置詞句の対立における場所ヲ格句の解釈上の役割につい

て検討し、その上で、起点の場所ヲ格句に関して指摘されてきた、意志性との関わりについて考察を加える。

3.1. 場所ヲ格句と「軌跡」の読みについて

場所ヲ格句が共起する動詞は、行為者が主語となる非能格動詞の場合だけでなく、非対格動詞の場合も一定の時間幅（持続時間）を持った事象を表す¹²。

- (55) a. 室温が12℃から22℃まで上がる 漸次的状態変化
 b. 畳の上をビー玉が転がる 漸次的位置変化

(55)aでも(55)bでも、変化は瞬間的なものではなく、瞬間瞬間に一定の値を示しつつ展開する。状態変化の場合には、その変化の途中の値（(55)aであれば中間的な室温）、位置変化の場合には、その変化における内項の実体の座標情報（(55)bであれば畳の上のとある地点）を示しながら、時間幅をもって変化が展開する。その結果、空間的な変化である位置変化の場合には、実体の瞬間瞬間の存在場所が稠密に並んだ軌跡が描かれる、と考えることができる。

修飾部用法の場所ヲ格句については、(56)bが容認されないことから分かるように、瞬間瞬間の動作の場所が軌跡を描きつつ移り変わるものでなければならない。

- (56) a. ふたりは歌いながら廊下を歩いた
 b. *ふたりは歌いながら廊下を足踏みした
 c. ふたりは歌いながら廊下で足踏みした

項の実体の場所ではなく動作やイベントの場所に関して、日本語では通常デが場所格後置詞として現れる。しかし、デが示す動作等の場所は、動作自体が場所を移っていく場合、解釈上の不自然さが生じることがある。

- (57) a. 凧子はステージをまっすぐ歩いた
 b. #凧子はステージでまっすぐ歩いた

(57)aでは、「歩く動作」が「ステージ」という場所に直線的な軌跡を描くという解釈が問題なく得られるが、(57)bでは「直線的に歩くこと」を「凧子」

が「ステージ」上で行う、というような解釈になる。

以上のように、場所ヲ格句は時間の展開に沿って軌跡を描くような漸次的位置変化や動きの存在する場所を表す。それは、基本的にある実体が静止している場所を表す場所ニ格句や、移動を伴わない動きや出来事の場所を表す場所デ格句にはない特徴である。この見通しをもって先行研究が場所ヲ格句に対して行った用法の区分を再確認すると、経路や経由点はすべて、何らかの軌跡の描かれる場所、つまり静止していない何事かが存在する場所、という理解で問題ない。

- (58) a. 太郎は遊歩道を歩いた (杉本 1986 : 282 (2))
 b. 校庭を走る (杉本 1995 : 120 (4) a)
 c. 公園を散歩する (杉本 1995 : 120 (5) a)
- (59) a. バスは駅前の交差点を過ぎた (杉本 1986 : 282 (3))
 b. 列車が鉄橋を通過した (杉本 1995 : 121 (8))

(58) (59) は杉本 (1986, 1995) で経路 (= (58)) や経由点 (= (59)) として示されているものである。(58) の場合、移動を伴う動きによってつくられる軌跡が場所ヲ格句の示す場所の内部に収まり、(59) の場合、項の実体の存在場所が描く軌跡が場所ヲ格句の示す場所の外側にまで伸びる読みが得られるが、どちらもそこに、何らかの軌跡、静止していない実体や動きの存在場所が存在するという点は共通している。

- (60) a. ビー玉がパイプの中を転がる
 b. ビー玉が畳の上を転がる

場所ヲ格句が示す場所の内部に軌跡が描かれるのは、(58) のような動きの軌跡 (修飾部用法) の場合でも、(60) のような実体の存在場所の軌跡 (二次述部用法) の場合でも可能である。

- (61) a. 吊り橋があったので、奏太は谷を渡ることができた
 b. 奏太は時間をかけて吊り橋を渡った

経由点については、軌跡が場所ヲ格句が示す場所の範囲をはみ出ることが一

つの認定基準となっていると思われるが、(59)bや(61)bからも読み取れるように、その基準からは一定の長さを持った場所も経由点に含まれることになる。また、(59)aや(61)aで確認できるように、基準点が狭い範囲であったとしても、そこをまたぐ形で明確に軌跡が描かれる読みとなっている。

こうしたことから、経路や経由点の場所ヲ格句とされるものに共通する意味的な特徴は、軌跡の存在する場所を示す、ということになるだろうと思われる。

このことは、状況の場所ヲ格句でも同様である。

- (62) a. 吹雪の中を山小屋を探した (杉本 1993 : 26 (3)a)
 b. 彼らは土砂降りの雨の中をグラウンドを走った
 (杉本 1993 : 26 (4)a)

(62)aでは、「吹雪の中」に何者かが山小屋を探すという行為の軌跡が描かれており、(62)bでは「土砂降りの雨の中」に何者かがグラウンドを走るという行為の軌跡が描かれている、というのが基本的な解釈である。杉本(1986)で明確に指摘されているように、状況の場所ヲ格句と共に起する動詞は「移動動詞である必要はないが、何らかの移動を伴う動作を表す動詞でなければならない(杉本 1986 : 298-299)」が、このことは動詞の表す動きの軌跡ではなく、行為や出来事が描き出す軌跡の存在する場所を示すものが状況の場所ヲ格句として把握されていることを示していると思われる。

本稿2節までの範囲で検討してきた場所の修飾部用法の場所ヲ格句は、(36)bで示したように非能格動詞の動詞句内で直接動詞を修飾するような要素として捉えることができたが、状況の場所ヲ格句については、動詞句レベルの構造を修飾すると想定することで、先行研究が状況の場所ヲ格句に指摘してきた特徴と矛盾しない分析が可能となると思われる。(63)に示すように、状況の場所ヲ格句は特に述語が非対格動詞であるか非能格動詞であるかに関わらず、また共起する場所ヲ格句が経路、経由点、起点等などの解釈であるかに関わらず、行為等の軌跡が読み取れる限りは容認性も高い。したがって、状況の場所ヲ格句に関しては、VPまたはvPの付加部に現れる修飾要素として捉えることに大きな問題はない。

- (63) a. 奏太は雪の降りしきる中を、たった一人で吊り橋を渡った

- b. 奏太は雪の降りしきる中を、たった一人で谷川を渡った
- c. ? 奏太は雪の降りしきる中を、たった一人で屋敷を飛び出した¹³
- d. 奏太は雪の降りしきる中を、たった一人でグラウンドを走った

残る課題は起点の場所ヲ格句であるが、すでに杉本（1983, 1986）において、場所カラ格句の表す起点と場所ヲ格句が表す起点には解釈上の異なりが存在することが指摘されている。

- (64) a. 国籍不明機が日本の領空を離れた (杉本 1986 : 315 (54) a)
- b. 国籍不明機が日本の領空から離れた (杉本 ibid., (54) b)

杉本（1986）によれば、「(54)a. (=本稿(64)a. 筆者注. 以下同様)の場合、「国籍不明機」は、「離れる」前に、「日本の領空」の中にいなければならない(中略)が、(54)b. (= (64)b)の場合、その必要がなく、「日本の領空」の近くにいた「国籍不明機」がそこから遠ざかる(中略)のでもかまわない(p.315)」とされており、この内省は筆者の内省と全く同じである。また、より重要なこととして、起点の場所ヲ格句とされるものについては、場所ヲ格句によって示される「領域内での移動」が必要とされるという指摘がある(杉本 1986 : 314)。この指摘は、場所ヲ格句が示す場所の中に時間の展開に沿って描かれる軌跡が存在することが必要とされるというように、本稿の観点からは読み替えられるものである。

なお、興味深いことに、着点の場所ヲ格句の存在が議論されることがある。

- (65) a. 官房長官が首相官邸を訪ねた
- b. 官房長官が総理大臣を首相官邸に訪ねた
- (66) a. 門を入った
- b. 門の中に入った

(65)aは三宅（1996）において「極めて例外的」とされているものであり、(65)bはその参照例である。(66)aは杉本（1995）において着点の場所ヲ格句をめぐって検討された例だが、(66)bのように別に着点が現れることから経由点の場所ヲ格句だと判断されている。こうした例についても、本稿の観点からすれば問題なく扱うことができる。つまり、場所ヲ格句の示す領域内に入って

くる軌跡でも、領域内での軌跡の部分が読み取れば、場所ヲ格句のかたちとなるのが許される、というように認定されることになるのである¹⁴。

こうしたことから、ひとまず状況や起点の解釈とされる場合も含め、場所ヲ格句には「軌跡」という空間的な概念を中核とした、解釈上統一的なアプローチが可能だと考える。以上の考察を整理すると以下(67)のようになる。

(67) 場所ヲ格句の各用法と「軌跡」

- a. 場所格後置詞句の対立の中で場所ヲ格句が担う役割は、漸次的な位置変化や移動を伴う動き等が形成する何らかの「軌跡」が位置づけられる場所を示すことであり、状況、経路、経由点、起点等、場所ヲ格句に認められてきた解釈はすべて、「軌跡の位置づけられる場所」という共通性を有する。(=(2) a)
- b. 場所の二次述部用法の場所ヲ格句は、同じく場所の二次述部用法のニ格句と同様に、内項の実体が存在する場所を示す。ただしこの場所は、内項の実体が漸次的に位置変化することで描かれる軌跡が位置づけられる場所であるという点で、静止した項の実体の動かない存在点が位置づけられる場所を表す二次述部用法の場所ニ格句とは対立する。
- c. 状況の場所ヲ格句を含め、場所の修飾部用法の場所ヲ格句は、同じく場所の修飾部であるデ格句と同様に、動詞が表す動きや、動詞句が表す行為等が位置づけられる場所を示す。ただしこの場所は、当該の動きや行為が事象の展開に合わせて場所を移すことで描かれる軌跡が位置づけられる場所であるという点で、軌跡を持たない動きや行為の場所を表す場所デ格句とは対立する。

この(67)が意味するところを確認するために付言しておく、場所ヲ格句が表す場所に位置づけられる軌跡には少なくとも、場所ヲ格句が示す場所内部に留まる場合(実体の場合であれば経路、行為の場合であれば状況)、場所に入り出ていく場合(経由点)、場所内部を移動しつつ出ていく場合(起点)、場所に入りつつ移動する場合(着点)とがあることになるが、これらはいずれも、場所ヲ格句にとっては本質的な対立ではなく、具体的にどの解釈になるかは共起する動詞の意味的な特徴によって指定されている。

3.2. 意志性と起点の場所ヲ格句

最後に、起点読みの場所ヲ格句に指摘されてきた、意志性との関わりについて検討を行う。以下は三宅 (1996) に掲載の例である。

- (68) a. 太郎が部屋を出た (三宅 1996 : 144 (4) a)
 b. *けむりが煙突を出た (三宅 1996 : 145 (9) a)
- (69) a. 太郎がこの道を通った (三宅 1996 : 146 (15) a)
 b. 涙が頬をつたった (三宅 1996 : 147 (16) a)

起点の場所ヲ格句が許されるためにはいくつかの条件が関与するが、その一つにその移動が意志的なものであるか、意志的にコントロールされているかという条件があることを、益岡・田窪 (1987)、杉本 (1995)、三宅 (1995, 1996) は指摘している¹⁵。また一方で、(69)のような経路読みの例では、移動が意志的であるか否かにかかわらず、場所ヲ格句が許されることについては、杉本 (1995) では注9で言及があり、三宅 (1996) では対格標示の問題との関わりから検討が行われている。

本稿では場所ヲ格句は場所格後置詞句の一つであり、(69)bのような例も、特に変わったところのない、漸次的な位置変化を表す非対格動詞の文ということになる。したがって問題は、本稿の観点からみて(68)bの容認性が低いのはなぜか、ということになる。このことに関して、まず以下(70)の各例を確認されたい。

- (70) a. 子供たちが迷路を出るまで数分しかかからなかった
 b. ?建物内で発生した有毒ガスが排気口を出るまで数分しかかからなかった
 c. ??煙が煙突を出るまで数分しかかからなかった
 cf. 建物内で発生した有毒ガスが排気口から出るまで数分しかかからなかった

確かに(70)cのような例では、その容認性は十分に低いですが、(70)bのような例では(70)aや(70)参照例と比較しても容認性はそれなりに高い。これは、(70)b主節の述部において「数分」という時間が示され、「有毒ガス」が建物から放出されるまでのプロセスが想起しやすくなっていること、および「有毒

ガス」の発生した状況に言及することで、「排気口」を出るまでの「有毒ガス」の状況が十分に想像可能となっているということが影響しているものと思われる。比べて(70)cでは、「煙」が「煙突」を出てくるまでのプロセスがほぼ想像できない。

ここで想起しなければならないのは、場所ヲ格句が場所格後置詞句の対立の中で担っている役割である。(67)aにまとめたように、場所ヲ格句は何らかの軌跡が位置づけられる場所を示すという役割を持っているが、「有毒ガス」の発生から放出までのプロセスが想起しやすい(70)bと、そうした情報を持たない(70)cでは、その軌跡の想像のしやすさに明確な異なりがあると言える。

(70)aの主格句は有生名詞であり、「子供たち」に視点を置いて、その軌跡を想起しつつ描写（または理解）をすることに特に大きな困難はない。一方(70)b, cのような無生名詞の例では、主格句に視点を置いてそのプロセスをたどるように描写（または理解）することは無条件ではできず、(70)bのようにそれなりの記述や描写を補う必要がある。この違いが、(68)bのような例の容認性を低下させているものと考えられる。動詞については「出る」と「離れる」となるが、類似の例を追加する。

- (71) a. しばらく濾過ユニット内を循環していた水が濾過ユニットを出て、ようやくタンク内にたまり始めた
 b. 未燃焼ガスが排気管を出てすぐに、排気管出口付近で爆発的に燃焼する
 c. 心臓を出た血液は1分ほどで心臓に戻ってくる
 (72) a. 夕日を受けて輝きながら、宇宙ステーションが関東上空を離れた
 b. ミサイルが発射台を離れて、夜明けの空に飛び立った

これらは、「濾過ユニット」「排気管」「心臓」あるいは「関東上空」「発射台」という場所ヲ格句が示す領域に、それぞれの実体が存在する読みがまず可能である。これは(64)のような例に関して杉本(1986)で指摘されていたことと同じである。またこのときに、場所ヲ格句が示す領域内に、項の存在場所が描く軌跡が問題なく位置づけられるため、「当該の場所内部を移動しつつ出ていく場合」という場所ヲ格句の起点的な例としての解釈が問題なく成立している。

以上から、起点的読みとされる場所ヲ格句と意志性との関わりについては、

意志性の問題ではなく、場所内部での軌跡を読み取りやすいか否かというある意味描写や理解に際しての視点の問題に還元・解消されることになった。

なおこれで、場所ヲ格句に認められる経路、経由点、状況の場合だけでなく起点の場合も含めて、意志性ではなく軌跡という空間的な概念が重要な役割を果たしていることが分かった。3.1節の冒頭でも確認したことだが、軌跡が読み取れることと、場所ヲ格句が現れる文の事態に漸次的変化や移動に関する時間幅が存在することとは直接の関係がある。このことに関連して、川野(2006)の移動動詞に関する分析を簡潔に確認しておきたい。川野(2006)では、移動動詞に対し結果性と限界性の二つの観点からの分析を行い、アスペクトと格体制の対応関係に関し以下のように述べている。

(73) 川野(2006)による「移動動詞の格体制」

起点・通過点・経路ヲ格句をとれるのは<-結果性>の動詞であり(より具体的に述べると、起点ヲ格句や通過点ヲ格句は<-結果性,+限界性>の動詞と結びつき、経路ヲ格句は<-結果性・-限界性>の動詞と結びつく)、一方着点ニ格句をとれるのは<+結果性>の動詞(すなわち、<+結果性,+限界性>の動詞)である。よって、起点・通過点・経路ヲ格句と着点ニ格句は共起できないと考えられる。(川野 2006 : 286 ②)¹⁶

詳細な議論は割愛するが、(73)が示すように、場所ヲ格句と共起する動詞が川野(2006)の言う<-結果性>の特徴をもつのは、場所格後置詞句の対立の中で場所ヲ格句が担当する「何らかの軌跡が位置づけられる場所を示す」という役割に由来または対応するものだと考えることができる。したがって、本稿の分析と川野(2006)のような動詞のアスペクトを中心とした分析とは矛盾なく合流できるものと考えられる¹⁷。

4. まとめ

本稿では、場所ヲ格句の文法的な位置づけをめぐって検討を行い、起点の解釈の場合であっても場所ヲ格句は後置詞句であること、場所の二次述部と場所の修飾部という二つの用法を持つこと、基本的に他の場所格後置詞句と一括して扱えること等をまず確認した。その上で、二つの用法と共起する動詞タイプ

の対応関係を整理し、二次述部用法が非対格動詞の文に、修飾部用法が非能格動詞の文に対応することを、特に有生内項を持つ非対格動詞の文の場合も含めて確認した。また最後に、先行研究が指摘する状況、経路、経由点、起点といった、場所ヲ格に認められてきた読みについてはすべて、何らかの軌跡が位置づけられる場所ということで統一的に扱えること、および起点の場所ヲ格句に認められてきた意志性との関わりは、むしろ軌跡についての描写や理解のしやすさの問題であると考えられることを指摘した。

本稿で取り上げることのできなかった問題としては、漸次的な位置変化を表す非対格動詞の語彙概念構造や内在的アスペクト構造の形式化、そして、構造格の対格マーカーと同じ形態である「を」が場所格後置詞句にも現れることの説明など、様々ある。しかし、場所ヲ格句を他動詞文直接目的語の場合と同様の対格名詞句だと考える必要はなく、場所格後置詞句の対立や体系の中で捉えるべきものである、という一点は明確にできたと考える。今後は特に、「を」や「に」のような文法格形式が後置詞句に現れることについての考察を進めていきたい。

注

- * 本稿は、第15回現代日本語文法研究会における口頭発表「場所ヲ格句の範疇と格の認可」(2019年3月8日、於実践女子大学)および第163回関東日本語談話会(2019年5月11日、於学習院女子大学)における口頭発表「場所ヲ格の意味論・統語論」を整理・発展させたものである。発表の際に貴重なコメントをくださった各位にお礼申し上げます。また、本稿査読者の方より多くの有益な指摘をいただいた。感謝申し上げます。なお本稿はJSPS科研費19K00623の助成を受けている。
- 1 状況の場所ヲ格句については本稿後半の3節で取り上げるが、この(1)bに従わない特徴を持っている。
- 2 「今日は男の子が3人スペシャル大盛りラーメンを食べている」のように、主格要素がNPであることを否定するような根拠が認められない場合でも、文脈や情報を補えば累積読みの解釈も可能となるため、累積読みの解釈が得られることがそのままその主名詞にあたる要素が後置詞句であることを意味するわけではない。したがって累積読み解釈の遊離数量詞は、主名詞にあたる要素が名詞句か後置詞句であるかを判別するテストとしては使用できないことになる。
- 3 影山(1980:43)では以下のような例をもって起点解釈の場所ヲ格句が直接目的語であるとする分析の根拠の一つとしているが、この解釈は明らかに累積の解釈であり、副詞的な遊離数量詞ということになる。したがって、本稿の基準からするとこの場所ヲ格句がNPであるという根拠とはならない。
 - (i) 部屋を3つ出たところで、先生に出くわした。(影山1980:43(7)b)

- 4 本稿では、文法格後置詞句における後置詞については(ii)aのように具体的な音形を持たないものとしているが、現状では(ii)bのように格助詞「を」を後置詞として扱う分析も成り立ち得る。本稿が、暫定的にはあるが(ii)aの分析を想定している理由は、(iii)aのように場所ヲ格句の「を」についても対格NPにおける「を」と同様に格助詞脱落が認められること、およびその場合も(iii)bのように遊離数量詞の解釈は変わらず、(4)a・(5)aと同様の累積読みとなることの2点からであり、「を」自体は格助詞脱落の可能な文法格の格マーカ―として分析しつつ、場所ヲ格句全体としては後置詞句として分析することを考えていることによる。
- (ii) a. [PP [NP 蛇管を] [P Ø]]
 b. [PP [NP 蛇管] [P を]]
- (iii) a. デモ隊が橋を渡ってこっちに来るよ
 b. #デモ隊が橋の2本渡ってこっちに来るよ 累積読みのみ
- なお、査読者のお一人から、場所ヲ格句を後置詞句とする分析では、他の後置詞とは異なり以下(iv)cのように「*-をの」という助詞の連続が形成できない点の問題となるという指摘をいただいた。
- (iv) a. つくばからの出発
 b. ステージ上でのダンス
 c. *公園の中をの散歩
- このことについても、「を」自体は場所ヲ格の場合も格マーカ―であって後置詞ではないと捉えることで、連体修飾の文法格の格助詞である「の」の前という環境において意味格後置詞の「から」や「で」等とは異なるふるまいをすることを適切に捉えられる可能性がある。詳細については今後の課題としたい。
- 5 (13)a, bは査読者の方よりご指摘のあった例である。
- 6 場所ヲ格句のうち状況ヲ格と呼ばれるものは、以下(v)の対が示すように、一定の意味の違いは生じるが場所デ格句との交替が容易である。このことから、状況の場所ヲ格句については動きの範囲を修飾する場所ヲ格句と共通した特徴を持つと考えられる。状況の場所ヲ格句の詳細については本稿3.1節で取り上げる。
- (v) a. 奏太たちは雨の中をゴールを目指した
 b. 奏太たちは雨の中でゴールを目指した
- 7 念のため(29)に即して遊離数量詞の解釈について確認しておくと、この場合の累積読みとは、一人、また一人というように「池に落ちる」という出来事の主体として合致する「男の子」を数えてみると3人いた、といった解釈であり、結果として多回的な読みが出てくるものである。部分読みとは、関係する「男の子」が3人よりも多くおり、その中で「池に落ちる」の主体に該当する者を数えると3人いた、というような解釈である。これらはどちらも石田(2013)が提案する「 θ 実体量化」の解釈であり、副詞的な数量詞の解釈である。なお、注8についても参照されたい。
- 8 以下(vi)のようにテイル形の述部とした場合に、非部分かつ累積的でない読みが得られる場合がある。
- (vi) a. 男の子が駅方向に3人走っている
 b. 男の子が川沿いの道を3人走っている

この解釈は、石田 (2013) が提案する「 θ 実体量化」の解釈であり、「(今) 走っている男の子を数えると合計3人」というようなものとなる。これは、川添 (1999) が後置存在量化詞について指摘するような読みである「男の子が3人いて、そいつらが走っている」といった解釈 (以下(vii)を参照) とは異なり、副詞的な数量詞に認められる解釈である。

- (vii) a. 男の子が3人駅方向に走っている
 b. 男の子が3人川沿いの道を走っている

この(vii)に見られる後置存在量化詞としての解釈は、石田 (2012) で指摘した「眼前描写的な同時把握量」に該当するものであり、 θ 実体量化の場合とは数量の把握の仕方が異なる。

- 9 この問題を含め、ナガラ節の統語的な環境については石田 (2019) を参照されたい。なお、石田 (2019) では、「所有文」に以下(viii)のような例のナガラ節を含めて議論している (石田 2019: 183(29))。

- (viii) a. 奥さんや子どもがいながら彼は無茶なことばかりする
 b. 冬美さんという奥さんがいながら彼はろくに家に帰らない

これは柴谷 (1978) では存在文に含まれるはずだが、無生名詞の場所二格句が現れる以下(ix)のような典型的な存在文の例とはナガラ節での容認性が明確に異なる (石田 2019: 183(30))。

- (ix) a.??(単身赴任中の「彼」のもとに家族が来ている) 昨日から部屋に奥さんや子どもがいながら彼は今夜も部屋に帰らない
 b.??会社の前に奥さんがいながら彼は出ていこうとしない

したがって、ヒト名詞の二格句が現れる(viii)と、無生名詞の二格句が現れる(ix)では、前者が有生二格句と内項主語の2項構造、後者が場所二格句と内項の1項構造という違いがあるものと思われ、これらはさらに有生の二格主語と内項の所有文と対立をすることになるが、石田 (2019) および本稿において、この点は十分には議論することができていない。今後の課題としたい。

- 10 テ節と主格要素が現れる逆接ナガラ節の容認性の関わりについては、石田 (2019: 185 (35) b)の例および脚注14)においても触れているが、詳細は今後の課題となる。

- 11 (48)b・(49)bともにこの語順でも副詞的量化詞としての累積読みならば可能なはずであるが、例文に与えられた文脈や副詞「ばたりと」および「がたん」との意味的な要因もあって、累積読みが困難となっている。したがって、同時読みが可能となる(49)bのみ容認性が高い。

- 12 場所ヲ格句と共起する動詞のアスペク的な特徴について本稿では十分に検討することはできないが、3.2節の終わりに若干の言及を行う。

- 13 (63)cが示すように、起点の場所ヲ格句と状況の場所ヲ格句が共起する場合、動作そのものが描く軌跡が短く、連動して行為の軌跡が十分に読み取れないことによる容認性の低下がみられる場合がある。しかしこれも、以下(x)のように何らかの文脈によって「飛び出す」という動作の軌跡だけでなく「奏太が飛び出す」という行為の軌跡も読み込めるようにすれば、基本的には他の状況の場所ヲ格句の場合と同様に扱うことができる。

- (x) 奏太は雪の降りしきる中を、凧子を助け出すためにたった一人で屋敷を飛び出した

- 14 たとえば(65)aでは「官房長官」がただ首相官邸という建物に向かったのではなく、建物内部を移動して何事かをなす読みが得られるため、これは軌跡が読み取られていると考えてよいと判断できる。(66)aも、以下(xi)aのような例であれば着点的な場所ヲ格句として認めやすくなるのではないと思われる。
- (xi) a. 奏太はお寺の立派な門を途中まで入って、それから引き返した
 b. 奏太はお寺の立派な門に途中まで入って、それから引き返した
- 15 本稿では場所ヲ格句は一貫して後置詞句であると見なしており、ここでは場所格後置詞句への「対格認可」の問題は扱わない。ただし、なぜ軌跡の場所を示す場所格後置詞句としてヲ格句のかたちが選択されるのかという問題については、本稿の観点からも重大な問題となる。今後の課題としたい。
- 16 本稿のアプローチにおいても、川野(2006)の「移動動詞の格体制」に関する記述においても、影山・由本(1997)や鷺見(2003)が指摘する(xii)のような例の扱いについては若干の議論が必要かと思われる。今後の課題としたい。
- (xii) a. 彼女は泳いで、英仏海峡をイギリスからフランスに渡った
 (影山・由本 1997: 133(6))
 b. 夜行列車は東海道を京都から静岡に進んだ (同上)
- 17 ただし、本稿(56)bの例からも確認できるように、動詞のアスペクト的な特性からだけでは、「足踏みする」のような動詞の文で場所ヲ格句が許されず、場所デ格句によってのみ動作の存在する場所が示されることを予測できない。川野(2006)は「移動動詞」という限定を行った上での分析であり、「足踏みする」のような動詞が場所ヲ格句と共起しないことについては議論の対象外となっていると思われるが、場所デ格句も含めた場所格後置詞句の体系を考える上では、アスペクトによる分析ではなく軌跡のような空間的な概念をもって分析を行うことに一定の利点があるものとする。

[参考文献]

- 石田尊(2012)「外項の遊離数量詞について：眼前描写的な同時把握量」『文藝言語研究 言語篇』62, pp.21-36. 筑波大学。
- 石田尊(2013)「副詞的とされる遊離数量詞の文法的な特性について」『筑波日本語研究』17, pp.1-29. 筑波大学。
- 石田尊(2015)「日本語の所有者上昇に見られる有生性制限について」『文藝言語研究 言語篇』67, pp.1-40. 筑波大学。
- 石田尊(2019)「ナガラ節内における主格の認可について」、竹沢幸一 他(編)『日本語統語論研究の広がり：記述と理論の往還』pp.171-190. くろしお出版。
- 影山太郎(1980)『日英比較語彙の構造』松柏社。
- 影山太郎(1996)『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版。
- 影山太郎・由本陽子(1997)「単語を超えた語形成」、中右実(編)『語形成と概念構造』pp.128-197. 研究社出版。
- 川添愛(1999)「日本語遊離数量詞の量化：後置存在量化詞と副詞の量化詞」『九大言語学研究室報告』20, pp.1-28. 九州大学。
- 川野靖子(2006)「移動動詞と共起するヲ格句とニ格句：結果性と限界性による動詞の分類と格体制の記述」、矢澤真人・橋本修(編)『現代日本語文法 現象と理論のインタラクション』pp.273-296. ひつじ書房。

- 杉本武 (1983) 「はなれる・はずれる・とおどかる」『日本語研究』6, pp.17-26, 東京都立大学.
- 杉本武 (1986) 「格助詞」, 奥津敬一郎・沼田善子・杉本武 (著) 『いわゆる日本語助詞の研究』第三章, 凡人社.
- 杉本武 (1993) 「状況の「を」について」『九州工業大学情報工学部紀要』6, 25-37.
- 杉本武 (1995) 「移動格の「を」について」『日本語研究』15, pp.120-129. 東京都立大学.
- 鷲見幸美 (2003) 「移動を表す日本語動詞の意味と格表示: 「わたる」を例として」『人文学部研究論集』10, pp.113-132. 中部大学.
- 竹沢幸一 (2000) 「空間表現の統語論: 項と述部の対立に基づくアプローチ」青木三郎・竹沢幸一 (編) 『空間表現と文法』 pp.163-214. くろしお出版.
- 益岡隆志・田窪行則 (1987) 『日本語文法セルフマスターシリーズ3 格助詞』くろしお出版.
- 三宅知宏 (1995) 「ヲとカラ」, 宮島達夫・仁田義雄 (編) 『日本語類義表現の文法(上) 単文編』 pp.67-73. くろしお出版.
- 三宅知宏 (1996) 「日本語の移動動詞の対格標示について」『言語研究』110, pp.143-168.
- 三宅知宏 (2011) 『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版.
- Ishii, Yasuo (1999) A note on floating quantifiers in Japanese. In *Linguistics: In Search of the Human Mind - A Festschrift for Kazuko Inoue*, Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (eds), pp.236-267. Kaitaskusha, Tokyo.
- Koizumi, Masatoshi (1994) Secondary predicates. *Journal of East Asian Linguistics* 3, pp.25-79.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese, Syntax and Semantics* 22. Academic Press, New York.